

有機的建築の研究

—R. シュタイナーの建築思想について—

本 村 佳 久

A Study on the Organic Architecture: R. Steiner's Architecture-Theory

Yoshihisa MOTOMURA

Abstract

Functionalism and Universal-space, which have led the architecture and urban design in this century, have begun to be criticized since the nineteen-seventies. Under the situation, several new designs and theories, for instance the Post-modernism etc. have attempted to overcome the so-called Modernism. But the new designs and theories have not won to get over the Modernism.

This paper reconsiders Rudolf Steiner's architecture-theory that has been forgotten behind the Modernism, for the purpose of discovering a clue to create a new and effective architectural design-theory.

The main theme and aim of Rudolf Steiner's architecture-theory is to have nature, human, society and architecture harmonize with each other, unify them and then bring about a harmonious development of the earth through creating the true spiritual, artistic architecture.

Key words: Functionalism 機能主義, Hugo Häring フーゴ・ヘーリング, Organic Architecture 有機的建築, Rudolf Steiner ルドルフ・シュタイナー

[序]

21世紀を目前とする現在、今世紀の〔近代〕建築を振り返り、将来の建築・都市デザインを展望する時、未だ明確に評価の定まっていないルドルフ・シュタイナー〔Rudolf Steiner 1861-1925〕の建築とその建築思想について考えることは、現在のいわゆるポスト・モダニズム建築が迷い込んでいると思われる〔近代のアポリア〕超克のためのひとつの重要な端緒とな

りうると考える (*1)。

近代建築理論における多くの用語は、概念規定を厳密に行なうことは困難である。例えば、ルイス・サリヴァンの「形態は機能に従う」という、流布された「近代建築」の命題の「機能」とは何か。機能主義という語を、能率・効率主義などの即物的意味のみに限定してこの「Function」ということばを使用した建築家は殆どいないであろうが、サリヴァンの機能主義においても誤解は多いと思われる。

心理学や社会学などと同様、建築学は人間・社会を総体として捉えることが要請されるが、この領域では「人間」・「建築」・「社会」の定義は建築家・研究者の数と同じほど存在するようにもみえる。例えば、サリヴァン・コルビュジェ等をも受けてであろう、丹下健三の「美しいもののみ機能的である」という、日本文化の「伝統論争」における逆説的なかつての表現は、当時の建築家の人間観・建築観・社会観・自己認識等を表わしているだろう。例えばここで、ルイス・カーンなどの言葉を想起してもよい。カーンにおいては、建築に「精神」をいかに注ぎ込むかが主要な課題であったであろうが、このようなテーマにとっては、「精神・人間」とは何かなどという根源的問いを問わざるをえない。ここで、「機能」は必然的に「精神」的機能をも含むこととなるだろう。

建築論においては「有機的」という概念も「機能的」という概念と同様に、明確に定義されず多義的に用いられているが、ここにおける「有機的」という語は、たんに、有機体・生物体の形態の表面的アナロジーとしての建築といった意味でなく、シュタイナーとともに、「精神に至る道としての建築」・「未来に有り得べきものとしての建築」を「有機的」建築と仮に名付けることとする (*2)。

ここでは、ルドルフ・シュタイナーとその建築思想について素描を試みるが、広範な分野－神秘学・哲学・文学・医学・教育学・農学・神学・社会問題・建築・芸術等－について、現在も刊行中の354巻に及ぶ著作（講演録、芸術作品を含む）を残している人物について、その全体像を捉え正確な評価を下すことは必ずしも容易ではない。彼の思想・建築作品・建築論は近代建築の主流からは長い間忘れられてきたが、近年、国内外の多くの分野においてアカデミックな意味においても研究されつつある（我が国では特に教育学の分野において）。

この小論ではシュタイナーの建築思想をフーゴ・ヘーリング等の有機的建築思想と比較しながら考察するが、シュタイナーについての研究はドイツ等諸外国においても糸口についたばかりと思われるので、先ず前提として、その生涯と思想・諸活動について簡単に後付けることとする。

(*1) ここでの「近代」建築という語は、オットー・ヴァーグナーの1896年の書名〈Moderne

Architektur)に由来する表現を慣例に従って使用する。また、[ポスト・モダニズム建築]は80年代の狭義の様式折衷的建築デザインのみでなく、70年代から現在までの現代建築の試みを総称している。

- (*2) F.L.ライトも自身の建築に[有機的]という語を使用しているが、これも自然形態の直接的模倣を意味しているわけではない。この小論においても、自然の形態を単に表面的に模倣した建築を有機的と呼ぶのではなく、自然(宇宙)の本質と人間の精神と建築との調和・融合を試みようとした建築といったほどの意味として使用する。

[1] 生涯

[幼少年期] ルドルフ・シュタイナーは1861年、オーストリアのクラレヴェックで生れた。父親は鉄道の電信技師であったため、半年後にウィーンのメートリングに転勤しポットシャッフ駅に赴任する。シュタイナーは、この地で幼年期を、美しく豊かな自然と鉄道(技術)という環境の中で成長し、8才の時にハンガリーの小村ノイデルフに移る。この村の代用教員の影響により幾何学・音楽・絵画などに興味を抱くようになる。11才でヴィナーノイシュタットの実業学校に入学し、幾何学・確率論・カントの著作に熱中し、14才から経済的な理由により家庭教師をしながらギリシャ語・ラテン語を独習しつつ、18才で優等で卒業する。

[ウィーン時代] 1879年にウィーン工科大学に入学、生物学・化学・物理学・数学等を専攻する。ウィーン大学においてもフランツ・ブレンターノの[実践哲学]などを聴講する。またカントの認識論の研究からフィヒテ、さらにヘーゲル・シェリング・ダーウィンの研究を行なう。この時期に神秘主義に通じた師と出会い影響・指導をうける。19才で、ウィーン工科大学でのカール・ユリウス・シュレーアの講義を契機としてゲーテ研究を開始する。この頃ウィーンの知的サークルに接し多くの芸術家・学者等と交わる。同時に脳水腫の子供などの家庭教師としての6年間の経験により、後に発展させる治癒教育学・教育学への端緒を得る。

[ワイマール時代](1889-1897)(ゲーテ研究) 21才の時(1882年)、キュルシュナー版ドイツ国民文庫のゲーテの著作中より自然科学論文についての編集を行なう。さらに28才の8月には、ワイマールのゲーテ・シラー文庫に招聘され、35才までこの地でゾフィー版ゲーテ全集の自然科学論文の編集を行なう。この間に、ロストック大学から[フィヒテの知識学を独自に考察した認識論の根本問題]により哲学博士号を得る。また、1889年にニーチェの著作に接したことから、1895年(34才)[フリードリッヒ・ニーチェー同時代との闘争者]を著す。同時にダーウィン・ヘッケルの進化論を研究する。1894年には、後の[人智学]への萌芽ともいえる哲学的代表作[自由の哲学]を出版する。

[ベルリン時代](1897-1913) (人智学協会設立-ミュンヘンでの芸術活動-ヨーロッパ各

地での講演旅行の開始)

1897年(36才)にシュタイナーはベルリンに移り[文芸雑誌]の編集を行なう。この間ボヘミア的芸術家サークルと交わり、また1905年までヴィルヘルム・リープクネヒトの開設した労働者学校で[精神変革史]等を講義する。1900年頃からは、生涯にわたってヨーロッパ各地において6000回程行なわれる、人智学的テーマの講演が開始される。主としてH. P. ブラヴェツキーの神智学(Theosophie)協会のために講演し、神智学協会ドイツ支部の設立時にその長に選ばれる(1902年-41才)。シュタイナーは1906年以来、協会の心霊主義の弊害を警告し、その結果、1913年(52才)協会から除名され新たに[人智学協会]が彼の共鳴者達によって設立される。この時期の主要な講演・著作として、[神秘的事実としてのキリスト教と古代密儀](1902)[神智学-超感覚的世界の認識と人間の本質への導き](1903)[いかにして高次世界の認識を得るか](1904)[アカシャ年代記より](1908)[精神科学的観点からの子供の教育](1907)[神智学概論](1910)、またミュンヘンで上演された4つの神秘劇の戯曲(1910-1913)などがある。1912年には言語・音楽などの本質を身体で表現することを目指す舞踊芸術[オイリュトミー]が創始される。

[ドルナッハ時代](1914-1925) (ゲーテアスムの建設-社会有機体の三層化運動-ヴァルドルフ学校教育) ミュンヘンでの神秘劇上演を機に、上演用の劇場を含めた人智学協会の建物建設のための[ヨハネス建築協会]が設立されるが、これは計画だけに終わり、その後スイス、バーゼル近郊のドルナッハに土地の提供を受け、1913年から1920年にかけて建築家・彫刻家・画家などがシュタイナーの指導の下に、木造の最初のゲーテアスムを完成させる。第一次大戦中に、シュタイナーはドルナッハとベルリンに交互に居住する。大戦前から盛んに講演活動を行なうが、戦後は〈社会有機体の三層化〉の運動を提唱する。1920年(59才)には煙草会社ヴァルドルフ・アストリアの代表エミール・モルトの要請により、会社付属の子供の学校[自由ヴァルドルフ学校]が設立され、人智学的教育運動が開始される。また同時期に、医学・治癒教育学・農学・神学などの各分野からも学者・専門家などの要請・依頼により助言・講演・著作を行なう。1922年の大晦日に、第一ゲーテアスムはナチ党員の放火のため焼失するが、翌年にはシュタイナー自身により正式に[一般人智学協会]が設立され、ドルナッハに本拠地が置かれることになる。ゲーテアスム再建の気運の中で、シュタイナーの手によって粘土による建築の外観模型までは造られるが、1925年に計画の途上にして64才の生涯を閉じる。その後、模型を基に共同者たちの手によって鉄筋コンクリートによる第二ゲーテアスムが建設される。(内部までの全体の完成は1957年)(図1・2)

[2] 思想・諸活動

R.シュタイナー自身の命名による〔人智学, Anthroposophie〕という思想とは何かとの問いに対しては、その全著作・活動をもって答えるしかないかもしれないが、ここでは〔ワイマール時代〕後期からの基本的文献・諸活動を簡単に取り上げる。

1) [倫理的個人主義] 初期の哲学的代表作〔自由の哲学〕には後の思想の基礎となる姿勢が提示されている。前半では認識の限界を超えようとする試み(認識論)が、これを前提として後半では〔自由〕の定義及び実践論が展開され、〈個人をあらゆる倫理性的の源泉とし、地上の生の中心〉とする〔倫理的個人主義〕が述べられる。〈自由であるとは、行為の基礎となっている表象が倫理的想像力を通して自ら決定されることをいう〉、また、〈自由な存在とは自分自身が正しいと思うことを意志することのできる人〉であるとし、この〈倫理的想像力〉とは、外的な権威による倫理ではなく、自らの内面から生ずる表象であるとする。そして、倫理的な生活のためには次の三つの事柄が必要であるとする。1) 人類全体の最大限の福祉そのものを目的とすること。2) 文化の進歩、ないし人類がますます完全性に向かって倫理的に発展することを目的とすること。3) 純粋に直感によって捉えられる個々の倫理的目標を実現すること。

2) [キリスト教学] 自伝によれば33才で〔自由の哲学〕を出版し、ある意味で徹底的に自律したこの倫理的個人主義を内面的に確立した後、シュタイナーは内面的に〈深刻な変化〉を体験し始める。それまで、〈心的体験を感覚器官に十分に注ぎ込むことができなかった〉のが、36才を過ぎる頃にその感覚がめざめるようになる。このような精神的状況の中で、ベルリンに移ってからの〔神秘的事実としてのキリスト教と古代密儀〕(1902)を完成するまでの5年間、シュタイナーは〈キリスト教をいかに捉えるべきかという問題を心中ひそかに厳粛な試練〉として受け止め、この課題に取り組む。自由の哲学までは、ニーチェの意味で反キリスト教的立場にあった彼は、この著作で、キリスト教を〈単にユダヤの預言者が預言したことへの成就であっただけでなく、密儀が予示していたことの実現ともなった〉とし、ギリシャ・エジプト以来の古代密儀が収斂したものと捉えている。

3) [神智学-人智学] このような内面的転回を契機として、この時期から40才にわたる10年程の間、人智学的主著が著され、多くの講演がなされる。〔神秘的事実としてのキリスト教と古代密儀〕に続く〔神智学〕において、シュタイナーは、〈人間の本质・世界の成り立ち〉について著わす。また、〔いかにして高次世界の認識を得るか〕において、認識のための方法論について詳細に展開する。人間を〈精神・霊性 (Geist)〉・〈心性・魂 (Seele)〉・〈身体・肉体 (Leib)〉として捉える点はブラヴァツキーの神智学などと共通するが、シュタイナー自身

の精神科学 (Geisteswissenschaft) という表現に表われているように、近代科学的な認識方法によってその [人間論]・[神秘学] を成立させようとしたことが特徴となる。〈高次世界の認識 (Erkenntnisse der höheren Welten)〉を得るための実践論として次のことを挙げる。1) 真剣な思考作業を自らに課すこと。2) 心の生活を健康にすること。3) 人間生活や人間外の世界が開くものに偏見を排してひたむきに帰依すること。4) 利己的な感情に従おうとする態度をやめること。5) 優れた美と不変の真理の法則に従って行為すること。

[アカシャ年代記][神秘学概論] などにおいては、宇宙の生成・発展論が展開される。

4) [第一次大戦後の諸活動] 主として、20世紀初頭から第一次大戦までに基礎付けられた [人智学] を背景として、第一次大戦中から1925年までの約10年間、シュタイナーは社会運動・教育運動・医学・治癒教育学・農学・キリスト教改革運動・芸術・建築等の各分野にわたって活動する。

1) [社会有機体の三層化運動] 第一次大戦後の1919年、彼は [ドイツ国民および文化世界に] という宣言を発表し、そのなかで、精神生活・政治生活・経済生活の三つの機構が各々独立し、自律的に併存し機能することが、理想的な社会の発展のためには必要であることを唱える。人体組織が、頭脳組織 (神経・感覚)・律動組織 (呼吸・循環)・代謝組織に分かれ、各々独立しながら相互に密接に関連して人体を健康に保っているように、社会組織 (政治・経済・精神生活) もそのようであらねばならないとし ([社会問題の核心] - 1919年)、〈精神の自由・法の下での平等・経済活動における友愛〉を実現しなければならないと呼びかける。この、社会有機体三層化の運動は南ドイツを中心に展開されるが、A. ヒトラーによって妨害を受ける。

2) [ヴァルドルフ学校教育] 同時期に (1920年)、設立された [自由ヴァルドルフ学校] の教育運動の背景・根底にも、[人智学] 的人間観・世界観が存在する。子供の霊性的・心性的・身体的発達にとって必要なものは何かが提示され、それと同時に具体的な授業の方法論が展開されるが、教育・授業の目標として学問・芸術・宗教が生命を持ちつつ統合されるようにすることが挙げられ、このような方向に子供を導いてゆく、教育という使命自体を最高の芸術的活動とする。

3) [医学・農学] この分野においても、従来の学問的業績に則ったうえで、医学においては、物質的な存在形態と心性的・霊性的存在形態としての人間の関連を明らかにし、治癒の本質を考察し、新たな治療法を提示する。農学においても、人間・地球・宇宙相互の関連を考察し、大地・植物・動物を健全化することによって、人間を健全にするための具体的営農法を指導している。

[3] 建築思想

ルドルフ・シュタイナーの全活動において、いわば通奏低音として鳴り響いているのは、〈宇宙における地球の調和的進化発展〉というテーマである。認識論・人間論・宇宙論のいずれもそれを実現させるための実践論と両輪をなしており、哲学・文学・医学・農学・神学・社会運動・教育運動・芸術等の諸活動において、視点は常にそこにある。唯物論と唯心論の統合から、学問・芸術・宗教を有機的に総合しようとする姿勢に至るまで、対極的なものすべてを統合しようとするが、その際認識と実践が融合し、各活動において理想を追及しながらも、現代の精神状況・現実への危機的な認識が根底にある。この点は建築思想・建築活動においても例外ではない。

建築・芸術の創造活動も宇宙的調和の世界を実現するための一環となる。〈将来における人間の魂にとっての悪から善への真の治癒は、本当の芸術がその精神的影響力を人間の魂と心に送り込むことの中にある〉とし〈平和・調和・人間らしい状態は、神々が私たちに語りかけるとき初めて生れてくる〉ことから〈芸術とはそれによって神々が人間に語りかけるための器官を導くこと〉であるとする。そのためには、自然・フォルムとの共鳴・共感、フォルムを内的に生きることによって〈正しい芸術的フォルム〉を見いださねばならないとする。

この〔フォルムの発見〕という点などにおいて〈有機的 Organhaft〉な建築を提唱したフーゴ・ヘーリング [Hugo Häring 1882-1958] の建築思想にも共通の考え方が見られる。1925年の時点で、ヘーリングはル・コルビュジェの〈幾何学的方法〉を批判しつつ、新しい建築の創造的形態化は幾何学の世界からではなく、有機的世界から基礎付けられねばならないとする〔フォルムへの道〕。〈有機的建築〉は合目的性（機能性）と表現とが一致したときに創造されるものであり、それが〈新しい精神性〉に向かうことであり、有機的建築においては〈自然的形態（生命・生成・運動）〉を表現しなければならないとする。すなわち、機能的フォルムの形態化への道は、自然の形態化への道であるとし、〈強制的に与えられたフォルム〉（コルビュジェの方法）ではなく、〈フォルムの発見〉（対象の本質の発見）を通して、自然とともに、その中で、〈響鳴 Einklang〉することによってわれわれ自身を見出さなければならないとする（*1）。

ここには、西欧近代哲学的な意味での〔主観〕と〔客観〕との二元論的対立を止揚しようとする姿勢が読みとれるが（ハイデガー、メルロ＝ポンティ等）、この点においてもシュタイナーの思想と同一の方向性がある。〈人間の器官としての建築〉というヘーリングの建築観の目標としているものは、〔人間－建築－自然〕の間に〔調和と統一〕をもたらすことにあるが、こ

こでもシュタイナーの建築思想との間に共通性がある。このような、ヘーリングの、〈フォルムの発見〉を通しての〈自然との共鳴〉という思想に比し、シュタイナーは、〈フォルムとの一体化〉からさらに〈自然の背後に横たわる精神的な力の中に入ってゆく〉という視点に至る。彼は〈芸術的創造の内的な原理〉を再発見すべきであるとし、芸術的創造は、〈世界の諸関係〉を生き生きと感受することから、また人間の本性に潜む力の充溢から生まれるとする。また、芸術的フォルムの根底には自己の精神的運動の直接的把握があり、フォルムを内面的に感じとり、フォルムに没頭することや、生成すべきフォルムをその生命において共感することを芸術的創造の前提とする。このような、[フォルムとの一体化・創造的共感]を前提として、芸術・建築創造は人間の本質の直接的表現であらねばならないとし、そのためには、人間の本質をその内面の生きた生成において把握しなければならないとする。このようにして、自己とフォルム（自然・対象）の本質を同時に把握し一体化しつつ、〈自然力の精神的流れ〉の中に入ってゆくことによって、芸術的・建築的創造が行なわれる。

そのとき同時に、〈何のための全体か〉という問いがその芸術感情の中になければならず、人間が自己と世界全体との関連を意識することにより、創造されるべき建築・芸術のフォルムも、自然・宇宙との関連において、〈有機的・生動的〉に形成されねばならないとする。その結果、建築は〈全く自然なもの、必然的なもの〉として、〈われわれが自分の感覚器官に包まれているかのような造形〉として表現されることとなる。このようにシュタイナーの、〈人間活動のいかなる部分も人間性の全体から生まれてくる〉という包括的な思想によって、建築の創造において、フォルムと精神との内的な交わりを通して、〈人間の規則的かつ調和のとれた全体の融合の姿〉の表現が目指される。ヘーリングにおいては、建築のフォルムを創造するにあたって、[自然との共鳴によりわれわれ自身を発見すること]が目標とされたが、シュタイナーにおいては、自然・宇宙と人間の本質との関連を見出すことから始まり、それを基礎として〈自己が宇宙的な世界全体へと拡大されてゆくことを感ずるようなフォルム〉の創造が指され、最終的に、このようにして創造された建築（芸術的フォルム）を通して〈愛を学び、同胞とともに調和と平和に生きることを学ぶ〉ことが目標とされる。それゆえ、建築・芸術創造にあたって、〈真の芸術・真の精神性・すべての人間への愛〉を持たねばならず、そのようにして創造された建築芸術の〈生き生きとしたもの〉を、〈平和・調和・愛の精神〉によって捉えなければならないとする（*2）。

シュタイナーの建築思想・建築創造においては、このように[人間-建築-自然（宇宙）]の間に[調和・統一]さらに[平和・愛]をもたらすことが目的とされる。

（*1）ル・コルビュジェは必ずしも初期の頃から幾何学的世界のみに関心していたわけではない。[建

築をめざして] (1923年) の中で, [平面 (プラン) は内から外に及ぶということ, なぜなら家屋も宮殿も生物に似た器官だからである。] と述べ, また, 人間の顔の美しさ [調和を感じさせる比例] について, [それはおそらく人間という有機体が自然と全く合致した軸線上にあるということ, それはおそらく宇宙すなわち自然の一切の物, 一切の現象が従う組織立ての軸線と同じものの上にあることだろう] とも書いている。さらに, [パルテノンの前に立ち止まるのは, それを見ることによって心の内の絃が共鳴するからだ]。これらはほとんどヘーリングの思想の同一線上にある。ただし1925年以前の作品 (シトロアン住宅-1922年, レスプリ・ヌーボー館-1925年等) においては, サヴォア邸 (1929-31年), やスイス学生館 (1932年) に見られるような〈有機的〉要素は認められない。(レスプリ・ヌーボー館の中央には木が一本, 象徴的に残されている。)

シュタイナーは, ヘーリングのように幾何学的なものと同有機的なものを対立的なものとは見做さず, 幾何学的なものは有機的なもの一部分であるとする。即ち, 鉱物 (幾何学的なもの) - 植物 - 動物 - 人間 (有機的なもの) という進化論的立場から, 〈有機的〉なもの (建築) は, 将来にわたる人間の進化にとってより有効であり, その意味で幾何学的なものはより低次の存在であることになる。従って, フォルムの造形化にあたっては, 幾何学的なもの - 直角・直線・平面 - は部分的意味は担わされるが, 前面に出ることはなく, 有機的なもの - 曲線・曲面 - が主役を演ずることとなる。

- (※2) ヘーリングは初期のコルビュジェの設計方法 (幾何学的方法) を否定したが, 既に, 初期のコルビュジェの建築思想において, 目標とする建築の〈創造的形態化〉の上で, ヘーリングやシュタイナーと類似の視点が見られる。

[標準は淘汰の法則を課せられた経済的社会的必要である。調和とはこの宇宙の諸規準との適合の状態である。美が君臨する。それは純然たる人間の創造である。]

[この〈調和〉の軸線は宇宙の調和の現象の統一を予想させ, 唯一の本源的創造者の意志を認めさせるかと思わせる。物理的法則はこの軸の結果であり, もしわれわれが科学とその生んだものを認める〈愛する〉ならば, それはお互いにこの一番もとの意志によって支配されていたことを認めるからである。]

[人間本来の軸と一致した瞬間, それはとりもなおさず宇宙の法則と一致する契機であり一般秩序的な秩序の軸に還元される時である。]

ここで語られる建築・芸術思想は, 真の芸術的・建築的, また自然 (宇宙) 的フォルムとの共感を建築・芸術創造の原動力とする点などにおいて, ヘーリング・シュタイナーの建築論と同一の方向性がある。これらの思想は, おそらく, シュタイナーの第二ゲーテアナム等の影響の後に, コルビュジェの晩年の作品 (ロンシャン教会等) に引き継がれ, 結実したと思われる。また同様にヘーリングの思想は, シュタイナーの思想をも含めて, ハンス・シャロウンの作品 (ベルリン・フィルハーモニー等) に。(図3・4)

[4] 結

ルドルフ・シュタイナーとその建築論を概観したが, その評価は先に述べた, 人智学的 [世界観] をどう捉えるかにかかってくるだろう。現在, ドイツを中心とする西ヨーロッパなどにおいて彼の教育運動・医学改革運動等が, いわゆる [アントロポゾフ] (Anthroposophe, 人

智学者)以外の一般社会,特に教育分野において市民権を得てきているが,背景となっている思想を考慮せずにその果実を受容するということは本来考えられない。わが国においても徐々に各分野で研究されつつあるが,短絡的に信奉者になることまた反対者になること以前に,まずその思想に価値があるとすれば,それを正当に評価すること,または誤りを正すことがなされなければならない。しかし彼の没後70年以上経た現在,少なくとも世界の状況に対する危機感,第一次大戦前後の当時以上に共有せざるを得ず,また地球の調和的發展を追求する姿勢も今日特に,継承して行かなければならない。

建築学・建築意匠の分野においては,欧米でいわゆる近代建築の運動が始まってほぼ一世紀経たるといってよいだろうが,これからのひとつ方向性,「何のための都市・建築か」といったことを考える時,シュタイナーの思索した建築論の方向は,可能性を秘めていると考える。前シュトゥットガルト大学教授の建築理論家・建築家ユルゲン・イェーディケ氏は80年代のいわゆる狭義のポスト・モダニズム的傾向に対して,それらの「建築作品」をあるレベルで評価しながらも,「独創性ではなく洗練された趣味,フォルムの創造ではなくコラージュ」は,「末期的文化の典型」であり「意図的センセーションリズム」であるとして,近代建築の行き詰まりの状況と捉えている。たしかにこのような傾向は,安易かつ過渡的帰結であり,改革・革新でなく「エピソード」,また同じく前シュトゥットガルト大学教授・建築構造家フライ・オートー氏の指摘したように「すぐにすたれる流行」であったと考えられる。近代建築運動の初期に現われていた「有機的」傾向の建築作品のなかの一部は,一時的な情念の噴出やエピソードではなく,シュタイナーの言うように「これから発展してゆく必然的なもの」の端緒であるかもしれない。(例えば,ミース・ファン・デル・ローエの初期のベルリン超高層計画やヘーリングの思想を継承したハンス・ジャロウンの諸作品等)。しかし,そうであるとしても,シュタイナー的形態の単なる表面的模倣は不毛であると考え。現在,ドイツのシュタイナー学校や,例えば,我が国のシュタイナー幼稚園等の一部の建築に見られるシュタイナー的「アントロポゾフの建築」の多くは,表面的模倣の域を越えず,これらは70年間の停滞であり,継承すべきであるとするならばゲーテアヌムの形態ではなく,それが建設されたときに目標とされた精神の方であるであろう。シュタイナーのいう「本質をその生きた生命において捉える」ことが目指されなければならないと考える。(図5・6)

R.シュタイナーの,「本当の芸術・建築による魂の悪から善への治癒」ということばは,空想的にも響くが,比喩的ではなく文字どおりの意味として言われている。しかし,例えばアルベルト・アインシュタインがコルビュジェの「モデュロール」について,「これは悪を困難にし,善を容易にするプロポーシヨンの言語である(これは善は簡単に,悪はこみいった障害つきでのみ表現する新しいプロポーシヨン言語である)」と評したことばが,直感によって本質

を捉えているのだとすれば、コルビュジェは、彼自身の言う〈宇宙の法則と一致する契機〉からこの〔比例尺度〕を（おそらくミケランジェロまたレオナルド・ダ・ヴィンチの作品との共感を契機として）取り出したのかもしれない、その意味で、同様にシュタイナーの建築思想も、実現すべき具体的課題であるだろう。コルビュジェはまた〈建築的な感動とは、作品のひびきが、われわれが支配をうけ、それを認め、それを讃えている宇宙の法則の音叉をあなた方の心のなかでならず時である〉とし、〈物理の法則は単純で数は少ない。倫理の法則は単純で数は少ない〉とも書いているが、〈芸術・建築〉とはこのように物質と精神とを融合し、ひとを善に向かわせるものでもあるだろう。シュタイナーにおける建築・芸術の目標はこのようなところにあったが、例えば、レオナルド・ダ・ヴィンチ、J. S. バッハ、空海などの、過去の芸術が成し遂げた成果を考えると、彼の数少ない建築創造は、このようなものを引き継ぎ、未来を見透して、新たな建築・芸術創造活動の端緒を開いていたと考える。

（付記）本稿は、東海大学工学部建築学科教授・上松佑二氏、前東京大学文学部教授・新田義之氏の研究会、また前慶応義塾大学文学部教授・高橋巖氏等の論稿に多くを負っているが、特にシュタイナーの文献の訳語等については変更の必要を認めがたかったため、殆どを上松氏・高橋氏のものを参照させていただいた。また、ヘーリングの思想については、シュトゥットガルト大学建設工学部の前教授・ユルゲン・イエーディケ氏の大学院博士過程研究室における論議に多くの示唆をいただいた。また、本稿は広島女学院大学学術研究・国外研究助成（1996年度）による成果の一部である。

〔引用文献〕

- [1] Rudolf Steiner: Mein Lebensgang I, II
 Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach Schweiz, 1961
 Johannes Hemleben: Rudolf Steiner, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg, 1963
 F. W. Zeylmans van Emichoven: Rudolf Steiner, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1961
- [2] Rudolf Steiner: Die Philosophie der Freiheit, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, Schweiz, 1962
 ———: Das Christentum als mystische Tatsache und die Mysterien des Altertums, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1959
 ———: Das Markus-Evangelium, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1976
 ———: Theosophie-Einführung in übersinnliche Welterkenntnisse und Menschenbestimmung, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1955
 ———: Wie erlangt man Erkenntnisse der höheren Welten?
 Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1955
 ———: Aus der Akasha-Chronik, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1975

- : Die Geheimwissenschaft im Umriss, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1962
- : Die Kernpunkte der sozialen Frage in den Lebensnotwendigkeiten der Gegenwart und Zukunft, Dornach, 1961
- : Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1960
- 新田義之他: ルドルフ・シュタイナー研究1-4, ルドルフ・シュタイナー研究発行所, 1978, 1979
- [3] Rudolf Steiner: Wege zu einem neuen Baustil, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1957
- : Und der Bau wird Mensch, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1982
- Heinrich Lauterbach, Jürgen Joedicke: Hugo Häring Schriften, Entwürfe, Bauten, Karl Krämer Verlag, Stuttgart, 1965
- Le Corbusier: Vers une Architecture
建築をめざして 吉阪隆正訳, 鹿島出版会 1967
- Rudolf Steiner: Der Dornacher Bau, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 1985
- [結] Stanislaus von Moos: Le Corbusier-Elemente einer Synthese
ル・コルビュジェの生涯 住野天平訳, 彰国社, 1981
- Jürgen Joedicke: Architektur im Umbruch, Karl Krämer Verlag, Stuttgart 1980

[参 考 文 献]

- Walter Kugler: Rudolf Steiner und die Anthroposophie, DuMont Buchverlag köln, 1978
- Mike Schmyt, Joost Elfters, Peter Ferger: Rudolf Steiner und seine Architektur, DuMont Buchverlag köln, 1980
- Rudolf Steiner: Die Erziehung des Kindes vom Gesichtspunkte der Geisteswissenschaft, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1969
- 上松祐二: 世界観としての建築-ルドルフ・シュタイナー論 相模書房 1984
- Erich Zimmer: Der Modellbau von Marsch und das erste Goetheanum, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1979
- Rudolf Steiner: Kunstgeschichte als Abbild innerer Impuls, Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung, Dornach, 1981
- Erziehungskunst monatschrift zur Pädagogik Rudolf Steiners 1996 Juli/August Thema: Schulbau, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart 1996
- Rudolf Steiner: Tafelzeichnungen Entwürfe Architektur, edition tertium, 1994
- Walther Roggenkamp: Das Goetheanum als Gesamtkunstwerk, Verlag am Goetheanum, Dornach 1986
- Jürgen Joedicke: Architektur der Zukunft der Architektur, Karl Krämer Verlag Stuttgart 1982
- Jürgen Joedicke: Für eine lebendige Baukunst, Karl Krämer Verlag Stuttgart 1965
- Hugo Häring: Fragmente, gebr. mann verlag berlin, 1968, その他

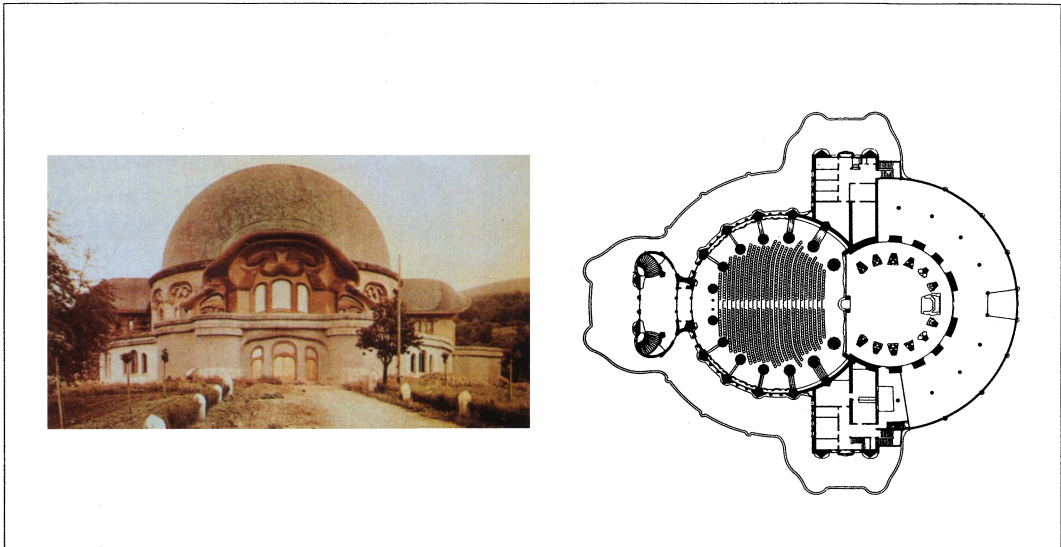


図1 第一ゲーテアスム (R.シュタイナー設計) 1920年

(出典・Das Goetheanum als Gesamtkunstwerk, Verlag am Goetheanum 1986,
Das Goetheanum und seine Umgebung, Verlag am Goetheanum 1985)

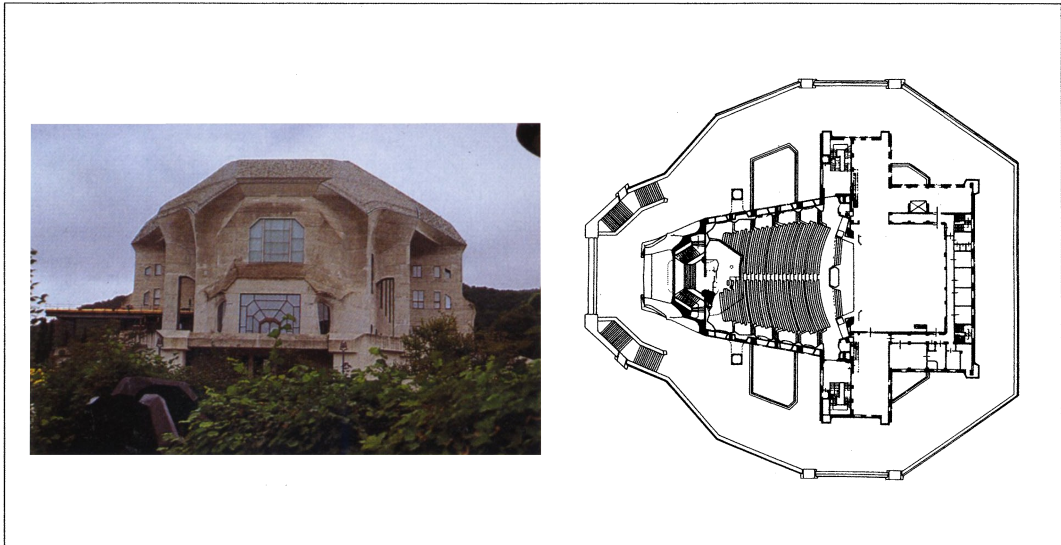


図2 第二ゲーテアスム (R.シュタイナー設計) 1928年

(平面図出典・Das Goetheanum als Gesamtkunstwerk, Verlag am Goetheanum 1986
写真：本村佳久 1996年)

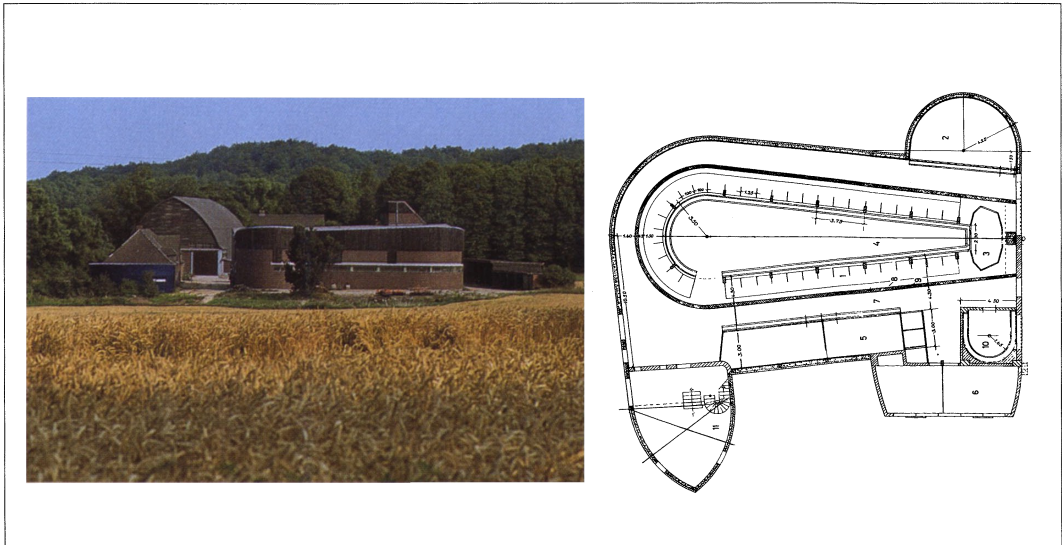


図3 ガルカウの農場（フーゴ・ヘーリング設計）1925年

（平面図出典・Hugo Häring Schriften, Entwürfe, Bauten, Jürgen Joedicke, Karl Krämer Verlag Stuttgart 1965 写真：本村佳久 1984年）

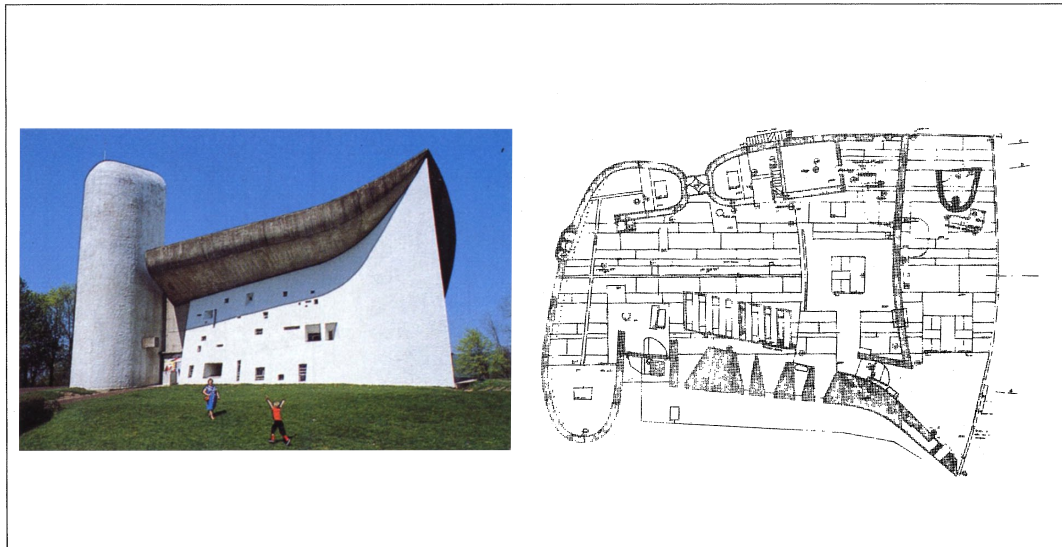


図4 ロンジャンの教会（ノートルダム・デュ・オー）ル・コルビュジェ設計・1955年

（平面図出典・Vom Sinn des Bauens, Christian Norberg Schulz, Electa/Klett-Cotta, 1979, 写真：本村佳久 1984年）

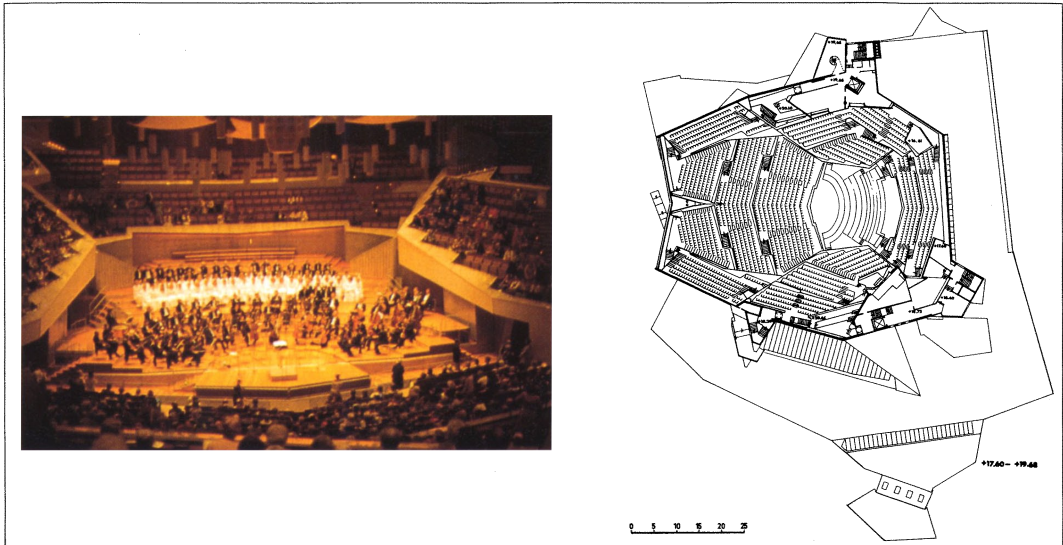


図5 ベルリン・フィルハーモニー（ハンス・シャロウン設計）1963年

（平面図出典・Hans Scharoun Eine Monographie, Peter Blundell Jones, Karl Krämer Verlag Stuttgart 1978, 写真：本村佳久 1996年）

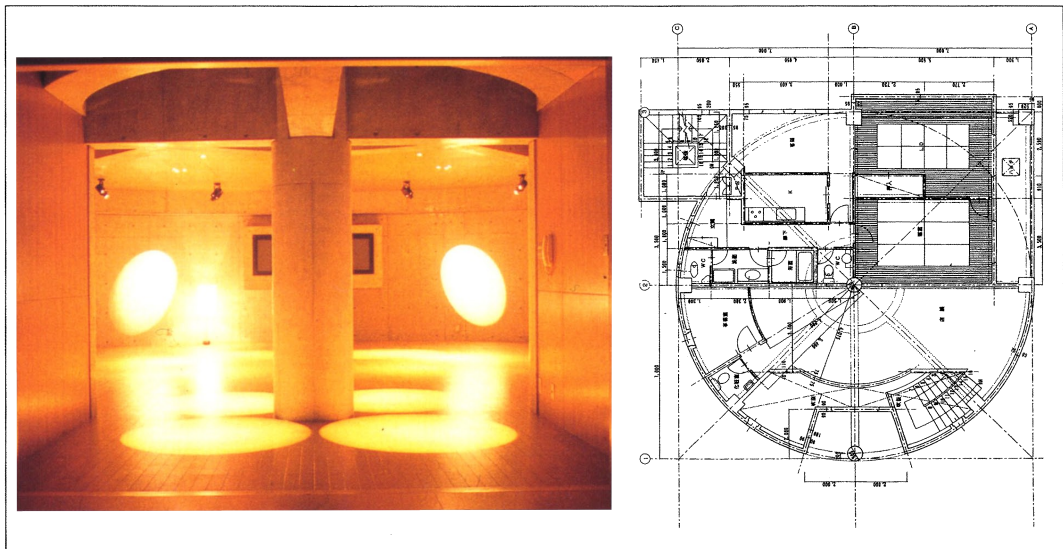


図6 ARCUS II（本村佳久設計）1996年（写真：本村佳久 1996年）